

第36回京都市地域リハビリテーション交流セミナー
「夫が脳で倒れて～仕事復帰（社会参加）へのステップ～」開催報告書

1 趣旨

地域リハビリテーション交流セミナーは、障害のあるなしに関わらず市民の方が相互に支えあい安心して暮らせる環境づくりを目的に、毎回テーマを変えて開催している。

今回は、50代で脳梗塞を発症した夫の復職までを綴った「夫が脳で倒れたら」（太田出版）の著者と、ご本人のお二人をお呼びして、復職までの実際について当事者、家族の立場から語っていただくほか、地域で障害者の就労支援をしている方々を交えたシンポジウムを行い、支援の現状や課題などについて情報、意見交換をしていただき、社会参加（復職）について考える機会とする。

2 日時

令和2年2月20日（木）14:00～16:15

3 場所

京都市地域リハビリテーション推進センター 1階研修室

4 内容

テーマ「夫が脳で倒れて～仕事復帰（社会参加）へのステップ～」

(1) 所長挨拶

(2) 第1部：講演（午後2時00分～午後2時50分）

「夫が脳で倒れて～仕事復帰（社会参加）へのステップ～」

講師：三澤 慶子 氏、轟 夕起夫 氏

○自己紹介

欲しい情報は重い麻痺を負いながら仕事復帰した人の具体例だったが、参考になるものが探し出せず、他者の参考になる事例と思い経験談として執筆した。本は意外にセラピストなどからも反響が大きかった。

○入院中

右半身に麻痺が残りにくいことも多く、必要以上に自信を失ったが、縁あって4ヶ月目にコラムを執筆したことで仕事復帰への自信となった。

○退院後

現場に行くこと、原稿を片手で打つことなどの大変さと体調が優れず無理が利かず、自信を失うことが多かったが、さまざまな配慮をしてもらい、質的には問題ない仕事ができている。

著者は病前の夫の仕事を把握しており、病後の仕事との比較ができたことで、仕事復帰が可能だと考えられた。

周囲も本人の能力や、フォローの仕方がわからないところがあったが、説明やお願いをして理解が得られた。



夫自身も原稿を仕上げたり、対談などで自信に繋がり仕事ができると思えた。会社員の場合との違いがあるが、熟知した元の仕事に復帰することがベストで、そのためには職場への説明や理解を促す支援、退院後のワークリハビリも健康保険で受けられるといった支援が必要と考える。

○締め

怖いイメージばかりがつきまとう脳の病気だが、脳梗塞のリハビリはゆっくり体の状態は改善される。社会復帰は可能だが後遺症も抱えながら仕事をし、生きていくことそのものがサバイバルだった。轟の経験はひとつの参考例だが、実際多くの方が職場復帰されている。職場復帰したい人があたりまえに正当に評価されて職場に戻る。そうなりつつあると思うし、もっともっとスムーズになればいいと思う。

(3) 第2部：シンポジウム（午後3時00分～午後4時15分）

登壇者：三澤 慶子 氏，轟 夕起夫 氏

清水 一史 氏（京都障害者就業・生活支援センター）

清水 聡子 氏（京都障害者職業センター）

宮川 直山 氏（u&n 障害者就職支援センター）

司会：京都市地域リハビリテーション推進センター相談課長 田中仙吾

○各機関のシンポジストより機関の概要や講演の感想などを簡単に紹介する。

○各機関で行う支援の対象者や機関利用の流れ、支援の実際などについて説明する。

- ・京都障害者就業・生活支援センターは、障害者の雇用の促進等に関する法律に基づき、ハローワークや障害者職業センター等の機関と連携しながら、就業面、生活面の一体的な支援を実施する。府内に8か所ある。
- ・京都障害者職業センターは、障害者の雇用促進と職業安定のため、障害者の職業リハビリテーションと障害者を雇用する事業主に対する相談事業を行う機関で、全国に設置されている。
- ・u&n 障害者就職支援センターは、就労移行支援事業として、主に新規就労に向けた職業訓練、職場とのマッチングや相談を行っている。

○三澤氏，轟氏より

- ・障害者認定が下りてからのサービスなので、病院ではこうした支援機関についての情報はなかった。先々のこととしても説明が欲しかったし、早期から利用できる支援機関が必要。
- ・入院中から情報があればよかったが、受け身なので、情報提供して欲しかった。

○支援機関から職場や当事者への助言

- ・利用者支援、職場への支援の両面があり、職場には、情報の提供により環境整備の必要性や当事者への配慮点などの対応を提案し、利用者には復帰に際しての目標設定や、無理のない復帰を目指す支援をする。
- ・体調管理を優先に配置転換や緩やかな復帰を考慮することを助言している。
- ・利用者には新規就労に向けた現状確認と能力開発を行い、よりよい職場とのマッチングを行っている。

○最後に一言ずつ

- さまざまな機関があることを知った。もっと前に情報が欲しかった。
- リハビリテーションの段階から、復職についての見通しやイメージが持てる情報や道筋があれば安心できた。
- 職場復帰のためには、職場の理解や障害者枠の存在もある。
- 逆に妻が脳で倒れていたら、自分にはこれだけのことができなかつたと思う。イメージを持っておくことも必要。
- 医療機関と支援機関の狭間があることも事実でだが、徐々に埋まりつつある。今後関わりを強めたいし、ご自身でもできることを増やして欲しい。
- 狭間の問題はあるが、仕事復帰の可能性はある。活動量を維持して欲しい。就労支援機関の知名度が低いので広く周知していく必要があると感じた。
- 三澤様は献身的なサポートをされたと思う。今後も講演活動をして欲しい。

(4) 相談課長挨拶

5 参加者

合計 104名

6 後援

一般社団法人京都府医師会
一般社団法人京都府理学療法士会
一般社団法人京都府作業療法士会
一般社団法人京都府言語聴覚士会
公益社団法人京都府介護支援専門員会
一般社団法人京都社会福祉士会
公益社団法人京都市身体障害者団体連合会
公益財団法人京都新聞社会福祉事業団
NHK京都放送局,
KBS京都
J:COM 京都みやびじょん
京都市教育委員会
社会福祉法人京都市社会福祉協議会

7 アンケート集計結果 (別紙)

8 J:COM 京都みやびじょん 取材
参加者へのインタビュー



